2024 年 7 月 26 日

関係各位

「敷居を踏む Step on the Threshold」展についてのお詫び

東京藝術大学大学院 国際芸術創造研究科
アートプロデュース専攻

この度、2024 年 6 月 10 日に「敷居を踏む Step on the Threshold」展にご出展いただいたアーティストのうらあやか様からご意見書を、また 6 月 26 日には同展のキュレーターのひとりである宮澤佳奈様からご意見書およびご要望書をいただきました。いただいたご意見とご要望を真摯に受け止め、関係者へのヒアリングを通じて事実関係の確認を行い、今後の対応について協議してまいりました。

出展アーティストのうらあやか様には、展示に多大なるご尽力をいただいたにも関わらず、クレジット表記を巡り不快な思いをさせてしまいましたことを深くお詫び申し上げます。展覧会に参加するかどうか判断する重要な点だったにも関わらず、誤解を招いてしまいましたことは、深く反省すべきと考えております。

一方で、うら様からいたいたご意見書のなかで「載せるべきクレジットを消すという決定」を行ったといったご指摘をいただきましたが、うら様の認識とは異なる経緯がございますので、別紙にて経緯をご説明させていただきたく存じます。

また宮澤様のご指摘にあるように、昨年度は研究科と学生たちのコミュニケーションが不十分であったことを鑑み、今年度は学生たちとの対話を重ねて早い段階から共通認識の構築に努め、出展作家のみなさまはじめ関係者各位とのより丁寧なコミュニケーションに努めてゆく所存です。さまざまな経験を教育研究活動に活かしてゆくべく、教員と学生とで話し合い、ともに考える場を設ける努力を惜しまずにしてゆきたいと考えておりますので、なにとぞ引き続き本学の教育研究活動へのご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

以上

「敷居を踏む Step on the Threshold」展のクレジット表記に関する経緯と理由について

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻（以下 GA と表記）は、うらあやか氏より、2024 年 6 月 10 日付の「「敷居を踏む Step on the Threshold」展における住友文彦氏のクレジット消去に関する意見書」を受け取りました。
GA が主催し、2024 年 3 月 23 日より 4 月 7 日まで、東京藝術大学大学美術館陳列館と周辺エリアにて開催された同展のクレジットには、うら氏の意見書にありますとおり、授業の教員の名前は表記せず、「本事業は、東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科が開設した授業の一環として実施されます。」という文言を掲載しました。
以下では、この表記にした経緯と理由についてご説明させていただきます。

【クレジットに関する経緯と理由】

GA では、将来、キュレーターを目指す学生が大学で展覧会制作を経験する際、２つの方法があると考えています。一つは、教員がキュレーションする展覧会を学生が補助的に手伝い、そこから学びを得ていく方法。もう一つは、学生がキュレーションする展覧会を教員が指導し、助言する方法です。GA では、2022 年度まで、長谷川祐子教授の授業で、陳列館を会場とする展覧会制作を行なってきました。当時は、「監修」として長谷川教授の名前を入れていました。（2022 年度で長谷川教授は退任）。

2023 年度は、住友教授の授業で展覧会制作を行いましたが、長谷川教授の時も、住友教授の時も、後者の方法を取っていました。すなわち、授業を履修した学生が、テーマを考え、作家を選び、作品や展示方法について考えてゆきながら、教員が、そのテーマがよく練られているか、テーマと作家や作品が合致しているか、作品が破損することはないか、観客が怪我をすることはないか、などさまざまな観点から問いかけ、助言する、という方法です。このように指導、助言はするものの、あくまで、展覧会の作者は、キュレーターである学生であると考えています。
うら氏を出品作家の候補に選び、出品を依頼したのもキュレーターである学生でした。2023 年 9 月の出品依頼の際添付した企画書もキュレーター学生が作成したものです。そのなかでは、キュレーション研究領域の 3 名（住友文彦教授、長島確准教授、鷲田めるろ准教授）が「監修」となっておりますが、それに関する研究科の意向は後述の【2024 年度以降の体制】の部分でご説明させていただきます。

その後、展覧会が近づき最終的なクレジット表記に関してキュレーション研究領域の教員３名で話し合い、キュレーター学生とも検討した結果、クレジットに教員の名前は表記せず、「本事業は、 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科が開設した授業の一環として実施されます。」とクレジットすることにしました。

その理由は、展覧会の作者はキュレーターである 4 人の学生であるので、その 4 人のクレジットをしっかりと出し、その展覧会を成り立たせている枠組みである授業や、指導者・

助言者である教員名に関しては、強く出さない方が展覧会の責任が明確になるだろうと考えたからです。キュレーターは、まだ学生であるかもしれませんが、展覧会において補助的な役割を果たしたのではなく、テーマを決め、作家を選んだ責任者であるということを、来場者に向けてはっきりと伝えたいと考えました。ただ、一方で、授業の枠組みの中でつくった展覧会であるということは観客に対して示した方がよいと考えました。

【五十嵐太郎氏への寄稿依頼に関して】

五十嵐氏への寄稿依頼については、まず、キュレーター学生の一人から、展覧会のテーマが「敷居」であることから、建築を専門とする人に依頼したいという案が出て、五十嵐氏が候補に選ばれました。五十嵐氏への打診時、住友教授が五十嵐氏と面識があったため、連絡をとり、キュレーター学生を紹介し、原稿の依頼等のやり取りを行いました。

こうした経緯から、五十嵐氏は、展覧会が住友教授の授業の一環として行われていることをご存じでした。上述のような GA の意図からすると、学生キュレーターの名前を優先してほしかったという思いはあるものの、「住友文彦さんの講義演習として多国籍の学生が企画」という五十嵐氏の記述自体は事実に相違ありません。

【2024 年度以降の体制】

2023 年度初頭から展覧会の実習をおこなう授業のありかたについて研究科内で見直しを進めていました。2023 年度のシラバスには事務手続き上間に合いませんでしたので、住友教授の演習の授業で展覧会制作を実施することにいたしましたが、2024 年度からは教員個々人の演習とは別の「キュラトリアル実践演習」という科目を新たに立ち上げました。

このように変更した理由は、キュレーション研究領域の一人の教員が自分の授業の中で指導する体制から、アートマネジメント研究領域やリサーチ研究領域も含め、研究室や専門領域を横断して、さまざまな教員が指導に関わり、また、履修する学生も、研究室や専門領域を超えて履修しやすい体制にしたかったからです。領域横断的であることは GA の特徴の一つで、2022 年度までも美術と音楽の領域を横断していますが、さらに 2023 年度から、キュレーション研究領域にパフォーミングアーツを専門とする長島准教授が着任し、より領域横断性が高まりました。この特徴を展覧会制作の授業にも活かしやすい科目構成にしたいと考えました。

こうした刷新の方針を受けて、2023 年度も住友教授の授業の中ではありましたが、学生キュレーターチームが、静的な展示よりも、ウォーキング・ツアーやワークショップ、パフォーマンス、ラウンド・テーブルなど動的な企画を目指していたこともあり、特にツアー企画の部分で、長島准教授からの指導、助言もありました。また、展覧会をつくる過程で、7 月に非常勤講師を含むキュレーション研究領域の他の教員が助言する機会も設けていました。現場のテクニカルな部分については、助教や助手がサポートしていました。そのような意味で、2023 年度においても、住友教授が担当教員として指導、助言しながらも、他の教

員も関与するように努めておりました。このように、2023 年度は、翌年度以降への移行期にあたり、2024 年度の独立した科目の新設への大きな方向性を鑑みても、2023 年度の展覧会のクレジットにゼミの担当教員の名前を表記する必要はないだろうと判断しました。2024 年度も前年度と同じ理由から、クレジットに授業を指導する教員名は掲載しない予定です。

【まとめ】

「敷居を踏む Step on the Threshold」展のクレジットで、住友教授の名前を表記しなかったのは、学生であるキュレーターがつくった展覧会であるという責任やオーサーシップをはっきりとさせたかったためです。出品依頼時にキュレーター学生からご説明したとおり、展覧会が履修生の主体的な取り組みであることは間違いなく、住友教授がキュレーターとして展覧会をつくったわけではありません。しかし、住友教授が全く関与しないということはなく、授業の担当教員としての指導や助言はしております。

住友教授の関与の度合いは、うら氏がキュレーター学生からの出品依頼に応じられるかどうかの判断に関わる重要な点であったにも関わらず、うら氏への説明が十分に明快でなかったことにつきましては、研究科としてお詫び申し上げねばなりません。その背景には、授業設計の移行期でもあったため、授業における住友教授の関わりかたも試行錯誤の状態で、キュレーター学生自身も理解しづらかったことがあります。2024 年度からは、領域を横断する多くの教員が関わるような新しい体制で、展覧会制作の授業を行なっております。

【アーツ前橋での事案に対する GA の考え方】

アーツ前橋での借用作品紛失事案に関する GA の見解は、キュレーション教育プログラム検討委員会が 2023 年 3 月 2 日に出した「報告書」のとおりです。
http://ga.geidai.ac.jp/2023/03/14/11899/

また、アーティスツ・ユニオンから東京藝術大学宛に送られた昨年 6 月 20 日付の公開質問上を受けた Tokyo Art Beat からの東京藝術大学への取材に対して、2023 年 7 月 10 日に以下のとおり回答しております。この回答は、2023 年 7 月 27 日に Tokyo Art Beat 上で公開されました。
https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/arts-maebashi-case-questions-to-tokyo-university-of-arts-insight-202307

この回答後、住友教授よりキュレーション研究領域を中心に学生に向けて説明する機会が設けられました。またオンラインや個別の研究室訪問で住友教授との対話の場を持つ学生もおりました。

今年度も当初より同様の説明会の開催を予定しており、さらに今回のご指摘を受けて住友先生と学生たちの対話の機会はさまざまな規模で何度も行われるようになりました。キュレーター学生の一人である宮澤佳奈氏からの要望を受けて英語での説明の回も設けられ

ています。昨年度の陳列館展に参加した学生たちの話し合いや、今年度の「キュラトリアル実践演習」の履修学生たちの話し合いなど、学生間の議論も非常に活発になりました。今後はキュレーション研究領域以外の教員も加わった対話の場も予定されていますが、昨年に比べて学生たちが各自の意見をより自由に述べやすい環境になっていると思われます。

うら氏が問題を提起し、ご意見をお送りいただいたことに感謝し、キュレーションをめぐるさまざまな課題にキュレーターはどのように対応すべきなのか、引き続き対話と考える場を設けることで本学での教育・研究活動の改善に反映していきたいと考えております。

【宮澤佳奈氏からの意見書・要望書】
GA はキュレーター学生の一人である宮澤佳奈氏より 2024 年 6 月 26 日付の「「敷居を踏む」展に関する意見書および要望書」を受け取りました。これに対しては、GA は宮澤氏と直接話し合い、宮澤氏の要望にあった話し合いの場を設けるように対応しております。